

魔女の手品

「イレイナ。実は私はですね、魔法が使えるのですよ」
修行の日々でのことです。

森の奥、木の上にひっそり佇む小さな家にて。

フラン先生は、とっってもおかしなことを仰いました。

「先生、疲れているんですか？」

星屑の魔女を名乗る我が師はどうやら自分が何者かをお忘れになったようです。嘆かわしいことこの上ないですね。

「あ、ごめんなさい間違えました。ちょっと待ってください。えっと……」

先生は『週刊 馬鹿でも分かる手品』と書いてある本のページのあたふたしながらめくったのちに、

「やってしまいました。今のは魔法が使えない人が使う台詞でしたか……。すみません最初からやり直してお願いします」などのたまうのでした。

……。

どうやら先生は手品とやらの興味があるようです。

「暇ひまなんですか？ 先生」

「暇ではありません。時間があるから、『あ、そうだ。手品とかできたら素敵かも』と思っただけです。それ以外に特に理由はありません」

「その状態を暇というんですよ」

「ところでイレイナ、今からちよつと賭けをしてみませんか？」

「賭けですか」

先生はテーブルにトランプを置きながら額うなずきました。

「今からイレイナには、このトランプの中から好きなものを一枚引いてもらいます。その一枚に書かれている数字を覚えて、また山の中に戻してください。私が見事に、あなたが引いたカードを当てて差し上げましょう」

先生は『週刊 馬鹿でも分かる手品』を片手に言いました。ちなみに創刊号は銅貨一枚だそうです。ただし次回からは金貨一枚。ぼったくりかな？

「……それで賭けというのは」

なんとなく先が見えていましたが、念のため、私は尋ねておきました。どうせ「私が買った皿洗いを代わってほしい」とか言うに違いありません。

「もしもイレイナが引いたカードを言い当てることができたら、私の勝ちです。皿洗いを代わってください」

ほらー。

キッチンには、大量のお皿や器たちが溢れんばかりに積み重なっていました。私がつい調子に乗って作りすぎてしまったが故に、使用した食器の量が馬鹿みたいなことになっていたのです。ついでにフラン先生が作り出した失敗作たちの残骸も一緒に置いて置かれていましたので、キッチンはまさに混沌そのもの。

あまりの量に嫌気が差したのでしよう。

で、魔が差したということなのでしょうね。

「ふふふ……、この本さえあれば、イレイナの目をあざむくことも容易いですね……」

イカサマする気満々なフラン先生でした。

「では、もしも先生が外したら、一週間、私の代わりに皿洗いをしてくださいね」

見破る気満々な私でした。

○

「さあどうぞ」

先生はトランプの束を扇のように広げ、こちらに差し出しながら言いました。描かれた赤い模様が楕円状に広がっていて、さながら花びらのよう。

「えい」

私はその束の真ん中辺りから一枚引っこ抜きました。ジョーカーでした。

その間、先生はちらちらと『週刊 馬鹿でも分かる手品』に目をやっていました。ちなみに創刊号には付録がついてくるそうです。

トランプの束の真ん中あたりにジョーカーを戻すと、先生ははっとして、「カードを戻しましたね？ それでは、今からイレイナが引いたカードを一番上に持ってきてみせましょう」と、トランプの束を、とんとん、とまとめました。

そのあとで、束の上に手をかざして、

「……えいやー」

などと、なんか呪文めいたことを仰っていました。ちょっと恥ずかしそうでした。そして一番上のカードをめくりまわす。

ジョーカーでした。

「イレイナが引いたのは、このジョーカーですね？」先生はしたり顔でした。「ふふふ。私はイレイナの師匠ですからね、あなたのことなら何でもお見通しなのですよ」

「……………」

「さあ。ではイレイナ。約束どおり、皿洗いを代わってもらいましょうか」
すごくしたり顔でした。

そんな彼女に、私は深いため息をつきました。

「大ハズレです。私が引いたのはそのカードじゃありません」

「おっと嘘はいけませんよイレイナ。私はあなたの師匠ですよ？ あなたのことなら何でもお見通

しです。あなたが引いたのは、間違いなく、このジョーカーです」

「いえ。そのジョーカーではありません」

「……何ですって？」

怪訝けげんそうで、どことなく不安そうな表情を浮かべて見せた先生に、私は端的たんできに申し上げるのでした。

「そのトランプ、全部ジョーカーでしょう？」

「……………何を言っているのやら。そんなわけがないでしょう」

「では二枚目をめくってみせてください」

「それはちよつと」

「先生」

「拒否します」

「不可です。めくってください」

「それはちよつと」

「早く」

「お断りします」

埒らちが明かないので、無理やり奪い取ってみました。

先生の手から奪い去ったトランプたちをテーブルの上に広げて見せると、見事なまでにピエロまみれ。ピエロばかり。こちらをひたすらに馬鹿にしてくるような小物くさい笑みを浮かべておら

れます。

ジョーカーでした。全部。

「どうやら私の勝ちみたいですね」

せいぜいしたり顔を浮かべて見せると、先生は実に悔しそうな顔をしてくれるのでした。

「……くっ。なぜ分かったのですか……。私の手品は完璧だった筈……」

先生はうらめしそうに、『週刊 馬鹿でも分かる手品』を睨んでいました。

「私は先生の弟子ですよ？ あなたのことなら何でもお見通しです」

私は言いました。



『週刊 馬鹿でも分かる手品』

その本は毎週、高い金をせびる代わりに、手品が簡単にできるようなグッズが付録としてついてくるようです。表紙の煽りに書いてありました。

ついでに、『今週は全部ジョーカーのトランプつき！ これで君も一流手品師だ！』とか書いてありました。

先生は私の目の前で読んでいたものですから、種も仕掛けも全て丸見えだったというわけです。別の意味で馬鹿でも分かる手品だったというわけです。

「この量を私一人でしなければならぬのですか……。ああ……。心が折れそうです」

キッチンにて広がっている惨状を目の当たりにしながらうなだれるフラン先生でした。

私がなぜ彼女の手品を見破ることができたのかは、今のところ、打ち明けていません。たぶん今後も打ち明けません。

だって、先生は私のことなら何でもお見通しなのでしょう？